

CID の諸君へ

松本茂雄

入学して、どうにか一ヶ月を経たわけですが、どうもクラスの雰囲気の良い。心の中は空虚で「大学ってこんなところだったのか？」などと思いついた。また、受験時代に「バラ咲き乱れるユートピア」と思っていた大学が、いざ入学してみると、荒廃と無秩序の暗黒の砂漠にすぎなかったと失望している人々も多いだろうと思う。その理由として、目的の喪失という事があるかもしれない。強制される事は、自由よりもある意味では確かに楽であると思う。受験時代には、どんな時にでも、心の中で、僕らを押えつけていた大学への壁をたえ、心の中からは忘れたい事がない程、大学入学と言ふ事は巨大な目的であり、その先までを冷静に見つめる程の余裕を現代は僕らに与えなかったのか、最も巨大な目的を失う事になり、わずかの不安の後に襲って来た「何とも言えない空しさ」となろうか？（別に確証はなく単なる私事ではあるが）まての推測であるので、多くの例外者はいらうと思ふ。そういふ人々も多々知ってはいらんだが、原則論として書いたまでです。そこで、そんな中でクラス全体で皆スクラムを組んで、共に考え、共に話し合い、共に何かを感じ取って行け、ばと思つてこの新聞を創刊した次第です。現在、クラブ活動、学生運動などやっつけ諸君もいるだろう。そして、その中で、友情、連帯感、情熱を感じ取つて、そのうち、それがそれだけで大いに結構で、むしろ、何かと勉めるつもりだ。が、クラスの場合にも、何かと勉めるつもりと感ぜると雰囲気と連帯感を持つて、よく、い、ろ、う、な、人、と、知、り、あ、い、語、り、あ、い、僕、ら、全、体、の、力、で、僕、ら、を、取、り、ま、く、多、く、の、問、題、に、対、処、し、て、行、き、た、全、体、で、ク、ラ、ス、新、聞、に、取、り、組、ん、で、欲、し、い、と、願、つ、て、い、

クラスコンパの報告

三輪三

去る五月六日、北京亭に於てクラスコンパを行ないました。時間の都合もあって、全体で一五名の参加者がありました。決して満足の行くものではありませんでした。その上連絡の不徹底などもあって、当日になつて急に階上の座敷が使用不能となり、会場を階下のテールでやることになつてしまふ非常に申しわけなく深く反省しております。その為、我々だけの独立した部屋がなく、雑然として盛り上がり、欠き、それに対処する有効な対策もなく、更に値段のわりに我々の腹の虫の要求を満たすだけの料理もなくさんざんのめにあいました。また一五名で二皿、一皿に対してセーハ名の大食家の群れ、たちまち料理どもは行方不明？ なんとか自分の分け前を確保するのには四苦八苦。特に下宿に集う悪党どもは、久しぶりの珍品料理とあって、この時とばかりに、必死にアタック。そのフットライトたるや朝の通勤電車でも通用するであろう。第一国目のコンパとしては、決して成功したとは言えませんが、今後には大きな参考となりました。これからもうした各種のクラス独自の活動を続けて行きたいと思ひます。

北京亭を告発する？

我々食しき学生からあのような多額の代金を取つておきながら、嚴格に代金分だけのサービスしかせず、金くけしからん我々、将来を嘱望されている学生に、それ相当のサービスをして、おいた方が、行くすえ何かとうまい話もあると思ふのだか？

一人あたり八〇〇円で一五人合計一三、二〇〇円、ビール一本五〇円、一五本五、二五〇円となり、現金九、四五〇円となる。その中からサービスク、税金として多くて三、〇〇〇円を差し引くと、六、四五〇円となり一皿に換算すると約六、四五〇円。どうみても我々学生の料理としてはいささか高報すぎる、ように思ふがいかなものだろうか諸氏。故に、我々は北京亭を我々貧乏学生の懐に大きな打撃を与えたのでここに告発する。

伝言板

- 一 法学部新入生勸迎実行委員会主催のソフトボール大会にC・I・Dとして参加申し込みをしましたので出場希望者はクラス運営委員まで申し出て下さい。(日時五月三・四・五)
- 一 クラス運営委員で府立女子大との合ハイを計画し、日時は未定、計画に加わって欲しいので有志は運営委員まで。
- 一 我がクラスの紅一点山之上さんワンゲルはどうですか。
- 一 心ある諸君へ、この新聞への投稿を願う。
- 一 話題は何でも可。すばらしい詩、俳句も求む。我があこがれの君(但し女性に限る)前歴、年令は問いません。
- 一 生協の食堂を大きくせよ。もう待つ時には飽き飽きした。
- 一 洗面所を整備せよ。

旅立ち (三)

俺が来たのは、薄ら寒い
雨の日だった。
俺がここに来たのは、全くの
偶然からであつた。
風が強い日だった。
そして、
全ての悔蔑をも
大都会の孤独をも
俺は知った。
俺は知る事によつて、
増々、俺自身は悲しくなり
踏切の近くで俺は
空を見た。
星の小ささと光の弱さに
俺は全く驚いてしまつた。
その場に立ちすくんでしまつた。
帰りたい。
素直に俺は感じた。
甘い感傷たどでもお前は
言ふのか。
しかし、この俺は本當に帰りたいんだ。
そして、今
俺はまだ帰らずにここにいて、
こんな風に泣き出した俺自身をかみ殺して
友と笑ひながら冗談を言ひあつてゐる。
俺はいつまでも
正しく泣けないのだろうか。
なおも若しむのが足りないといつても
言ふのだろうか。

歌唱指導

と言ふ名の
 なたを尋ねて
 国へと
 又た汽車に乗る
 あなたは私の昔の思い出
 いるさとの夢 初めての恋
 けれど私が
 大人になつた日に
 黙つてどこかへ
 立ち去つたあなた
 いつかあなたに
 また逢ふまでは
 私の旅は
 終りのない旅

